

研究専攻（専門領域）		文化構造（社会学）		学籍番号	08CS021
氏名	郭一娜	ローマ字	GUO Yina	国籍 (留学生)	中国
修士学位論文名		「加害」の南京、「被害」の広島—— 歴史教育からみる歴史博物館の中日比較			
提出年月日		2010 年 1 月 12 日		指導教員	深澤建次
体裁 ()		75 頁（1 頁文字数 1600 字）		言語	日本語
別冊添付資料等					
キーワード		歴史教育、日中関係、平和博物館、南京、広島、大阪、加害、被害			
<p>本論文は平和博物館の歴史展示の特徴と問題点の解明を目的にする研究である。中国、日本両国の 2 つの代表的な平和博物館、すなわち「侵華日本軍南京大虐殺遭難者同胞記念館」（南京記念館と省略する）と「広島平和記念資料館」（広島資料館と省略する）を研究対象にして、両館の展示主旨、具体的な展示物を比較することにした。</p> <p>本研究の特徴は 2 つある。1 つは、従来の旅行日記のような形の博物館論とは違って、一定の基準に基づいて、両館の展示を具体的に比較分析したことである。すなわち、概括パネル、ジオラマ、因果展示を焦点に比較検討を行った。もう 1 つは、自らのフィールドワークで一次資料を収集したことである。筆者は数回にわたり、両館へ足を運び、館内の展示をメモし、写真を撮り、館長への直接インタビューをし、現地の歴史専門家の話を聞き、見学した観客に聞き取り調査を実施した。</p> <p>この論文は次のような 5 章に分けられている。序章は、研究の経緯、意義と独自性、方法を述べる。第 1 章は、両館の展示主旨を解明する。ホームページ、パンフレット、館内の「始まり」と「終わり」の展示パネル、館長のインタビューという 4 つを総合的に比較する。そして南京記念館では、日本軍の暴行を忘れずに、愛国心を養うという展示動機が、広島資料館では、原爆被害を忘れずに、核廃絶へ賛同するように導きたいという展示動機が作用していることを明らかにする。第 2 章は、館内の概括パネル、ジオラマ、因果展示を考察する。そもそも戦争そして平和を理念とする博物館であるかぎり、被害と加害の両面をバランスよく展示しなければならないはずである。けれども両館はいずれも、加害と被害のリアリティーのうちの一方を過度に強調しているのである。南京は日本軍の加害を、広島は原爆の被害を一面的に強調しているのである。いずれも展示にも、自他の戦争原因への追究と反省はほとんど見られないのである。双方の博物館は、自らの都合によって、複雑な歴史事実、あるいは 1 つの史実にある複雑な関係を単純化し、一筋の主旨に収束させ、主旨に沿わない事実を展示からはずしているのである。これが単純化問題である。</p> <p>第 3 章は、見学者の反応に焦点を当てる。館側が提供した感想ノートを検討すると、両館は、両国民の相互理解に一定的な役割を果たしているが、単純化した展示は見学者の歴史認識の形成と深化に否定的な影響を与えることを明らかにする。</p> <p>第 4 章は、日中両国でも高い評価を受けている、公立平和博物館「大阪国際平和センター（ピースおおさか）」の展示手法を取り上げる。南京や広島と比べて、被害・加害の展示バランスがとれているからである。そして「ピースおおさか」を念頭に、公立戦争/平和博物館のあるべき姿を模索する。</p> <p>本研究は、日中両国の代表的な平和博物館の展示内容の現状と問題点を明らかにし、両国の真の相互コミュニケーションを図る方途をさぐるものである。両館の展示が、本論で述べるような形で改善されるならば、両国民の誤解を解く一助になるであろう。</p>					